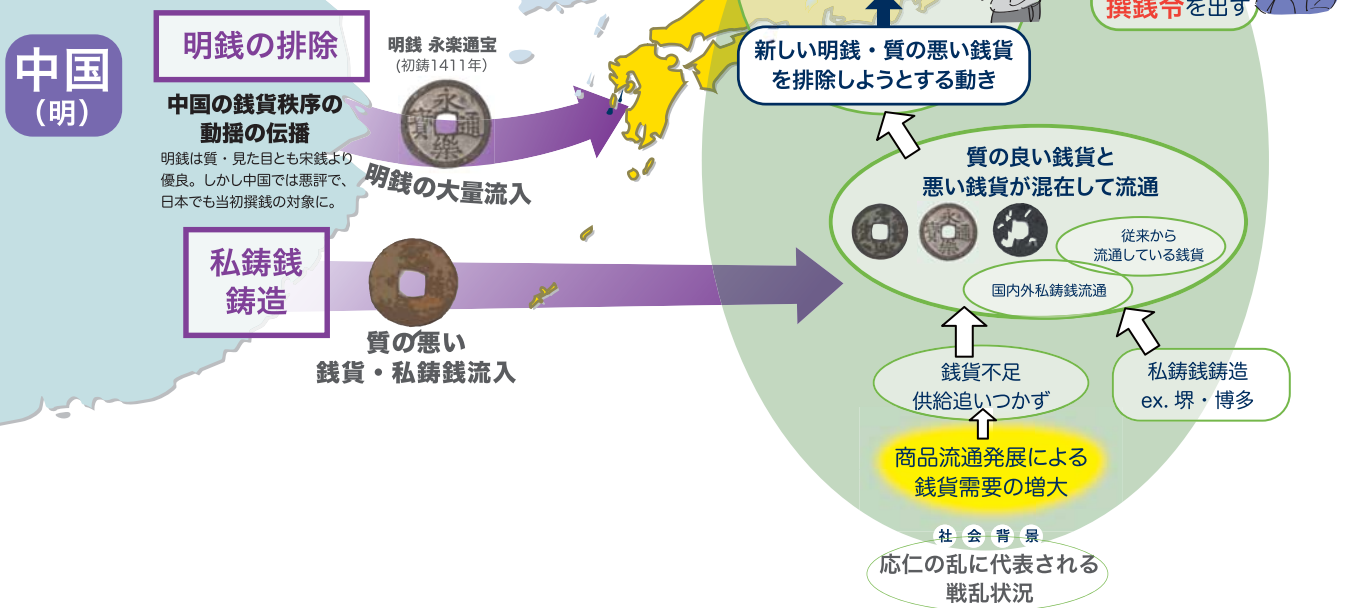


15世紀後半～16世紀前半

撰銭の発生 - 1枚=1文の崩壊 -

明銭や粗悪な銭貨が中国から流入したことを背景に、15世紀後半以降、銭貨は種類により区別されるようになり、それまで安定していた銭貨1枚=1文という中世貨幣の特徴は崩れていきました。そうした中、銭貨流通を円滑にするために出された法令が“撰銭令”です。



16世紀後半

銭貨流通の縮小と金銀貨の登場

16世紀後半、中国からの銭貨供給が途絶し、銭貨が希少となったことなどから、1570年代の西日本では、土地などの大口の取引は、銭貨による支払い（銭遣い）が米による支払い（米遣い）に変化しました。また、各地で鉱山開発が進み、金貨・銀貨が使用されるようになりました。



なぜ撰銭は起こったの？

中世後期、商品流通が盛んになり大量の銭貨が必要とされましたが、供給が追いつきませんでした。その状況下、国内外の私鑄銭や評判の悪い明銭が流入し、様々な銭貨が使われたことが撰銭の原因と考えられています。



明銭 洪武通宝
初鑄 1368 年

撰銭令

幕府や大名は、銭貨の通用基準を定めた撰銭令をたびたび出します。



幕府・大名

15世紀末～

- ・悪銭は受け取らなくていいよ
- ・でもそれ以外は銭種で区別しないで

全て1枚=1文で受け取りなさい。



織田信長

1569年

悪銭も含め銭種間で決められた交換比率の通り使いなさい。

もう1枚=1文ではなくていいよ。
(銭不足だしね。)

"びた一文" に秘められた歴史

「そんなものにはびた一文払えない」

という表現は質の低い銭貨を「びた銭」と言ったことに由来します。

ただ、16世紀後半の史料に見られる「ヒタ(びた)」は、良質な永楽通宝よりは低品質であったものの、広く流通していた銭貨で、必ずしも質の悪いものではなかったと考えられています(精銭)。

「質の低い銭=鋸銭」という意味で使われたのはもう少し後の時代とされています。

16世紀末の銭貨
(東日本の場合)



永楽通宝
希少化



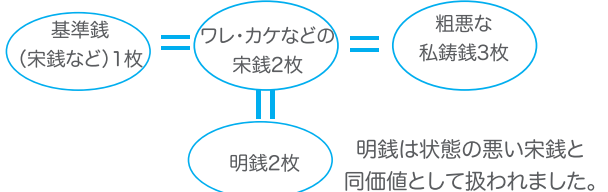
「ヒタ(びた)」
精銭として広く流通



質の悪い銭貨

中国の撰銭

中国では、15世紀中頃から撰銭が発生しました。
(1460年代北京の銭貨の交換相場)



中国の私鑄銭と日本への輸出

中国東南部(福建・浙江)では、私鑄銭が盛んに鑄造されました。鄭舜功『日本一鑑』には、福建の龍溪地方で作られた私鑄銭を、日本が輸入していたことが記されています。日本で「なんきん」などと呼ばれた銭が、この私鑄銭にあると考えられています。

なぜ金貨・銀貨が登場したの？

— 鉱山開発と銀の輸出・金銀貨の登場 —

16世紀、金銀の生産量は戦国大名による**鉱山開発**と**技術革新**により飛躍的に増大し、銀が東アジアへ輸出されました。

また国内では、16世紀後半に石州銀や甲州金に代表される領国貨幣が登場しました。それらは高額商品の取引のほか、軍事的にも盛んに利用され、社会に浸透していきました。

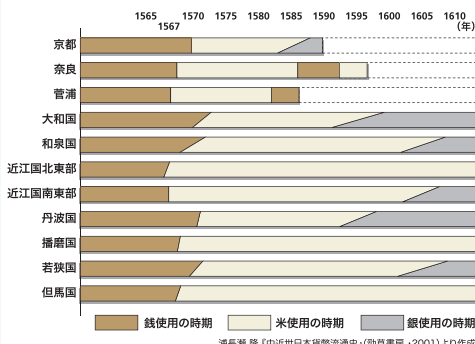
ティセラ/日本図(1595年)
「Hivami」(石見)付近に
「Argenti fodinae」(銀鉱山)の記載
(島根県立古代出雲歴史博物館蔵)



銭遣いから米遣いへ

(西日本:1560年代後半～1570年代初)

銭・米・銀の使用の変化



石高制(生産力を米で換算)は、この頃の銭貨流通の変化と、長期にわたる戦乱・都市建設ラッシュなどに伴う米需要の増大といった要因により成立したものです。

中国へ流れ込む銀

銀の流通拡大

中国では、14世紀から米などの現物により納税されていました。しかし、15世紀半ばになると銀の流通が盛んになり、北京の官人による**銀での給与の支払い要求**や江南地区の一部の**徴税の銀納化**がおこるなど、銀の浸透は顕著になります。

1570年代の銀の大量流入と私鑄銭の鑄造停止

1570年代になると、南米・ボトシ銀山の増産などをきっかけとし、アメリカ大陸の銀が中国へ大量に流入しました。私鑄銭鑄造の中心であった福建では、「銅銭を溶かして捨て、民間ではみな銀を用い、また銀秤を持つ」ようになり、中国での私鑄銭の鑄造は停止しました。これにより、日本は銭貨の供給元を失うことになりました。

